

## 14の講義内容 言語文化「西欧言語文化圏」

### —その3 英国・米国と日本—

欧米国から近代日本が得た生活の基本である「衣・食・住」の文化は計り知れないものがある。明治の雑誌『太陽』を通して考察してみることとする。

まず最初に、前田正名（談）「肉食の必要」というコラムがある。次に挙げておく。

#### 一 肉食の必要（前田正名氏の談）

縦ひ肉食の人生に必要ならざるは、方今學者の往々唱ふる所なりとするも、我人の經驗は實に人生の強健上其必要なるを知る、大和人種の改良上肉食の必要なる、余輩常に之を唱ふる一日の故にあらざ、近頃前田正名が京都に於ける全國家禽及畜産家の懇親會場に於て談話せる所、聊か穩當に欠く所なきにあらざるも、其要記するに足らずとせんや。

今我邦の時勢を佛國ヘンリー四世の時代（今より五百年前）に比すれば進歩せしもの頗る多し然れども鶏、牛等家禽家畜の如きに至りては當時の佛國よりも日本は更に劣等の地位にありと云はざるべからず。ヘンリー四世曾つて君側に語て曰く、何れの日か我國民をして一週一度づゝ鶏肉のソツプを飲むを得せしむべき乎と、然るに今日我國民は一年一度鶏肉を食むしむること容易の事にあらず。不幸にも全國到る所、牛鍋屋・しやも屋など堂々として招牌を掲げ居ること之れ國の富まざることを證し、家禽家畜の盛ならざるを證するものといふべし。誠に耻ヶ敷ことなり。此看板を撤去せしむると否とは諸君の熱心 如何にあり宜しく牛肉鶏肉の如きは毎日戸毎に野菜を扱ふ如くならしめざるべからず

世人口を開けば歐米と對立を説く然れども吾人の躰格は其祖先より遙かに劣れり殊に近來時勢の切迫より空理空論の爲めに惑はされ神經病者の増加を來せり是れ畢竟躰力健全ならざるが爲め十二分の勇氣を以て神經の過敏に打勝つ能はざるに依れり日本を以て一世界を見做せる時代には大根菁蕪にても宜しからんかなれども已に萬國と衡を争はんとする今日の場合躰格は尤も壯ならざるべからず則ち文明各國は一人平均牛肉八十斤乃至百五十斤を食し日本人は僅々一人平均半斤強に當る予等幼少の時分實際犬を撲殺して喰ひ斃牛肉等を喰ひ健啖を以て誇りし時分には勇氣勃勃身躰も甚健康なりしも其後長崎に遊學せし頃よりは其等の食物なき爲め勇氣稍く衰へたるを感ず玉利學士の如き其他の諸君は熱心私費を抛ち斯業の爲めに盡せるも一人の力以て十分の効果を奏し難きは當然なり須く此協會團結の力を以て上下共に此業の一家及國家に有益なる所以を悟らしめんことを夫の壯麗なる第宅別墅を起して而かも身躰の榮養に毫も思ひ至ることなく又花柳社會に放浪して豪者の遊を事として而かも其身躰殆んど衣に堪へざるが如きもの世間其人少しとせず果して之れ何の心ぞや國民筋骨の強を圖り盡く健全の人たらば國家の強健は自ら此時に見るを得ん今日の時勢は家禽家畜の業を盛にして國の要素を鞏固ならしむべき好機會なりと云ふべし云々

次に、同じく七月号に、科學「電書機」というコラムが見えている。

## 二 電書機

電話機の發明ありてよりは、人類は數千里外に達する音聲を附與せられたるが如く、身はシカゴに在り乍ら、紐育の人の音聲を宛がら其目前に在るが如くに聞くことを得、實に此發明ありてより萬般の事務上に著しき變化を來しぬ、されど他の物の如く此機にも亦缺點無き能はず、賣上等に甚だ安全ならず、精細なることを通知し、或は記載の必要ある場合等は非常に不便にて、又特種なる名稱記號等前後の語無くして了解し難き事屢々あり、又之に據りて賣買等の約定を爲し、若し紛争を生ずる事ありても、何の證據も残らざれば、之を法庭に訴ふる事能はざるなり、

此程米國にて發明したる電書機と名くる新機は、能く是等の不便を補なひ、電信電話の兩機に優れる完全なるものなり、即ち其名稱の示す如く、電氣の作用にて書を遠距離に傳通し得べき機械にて、發信機に書すると同時に、同一の文字が受信機の紙上に顯はるゝ仕懸けなり、解釋すれば、懸隔せる兩地にて同時に一對の事を書く長き筆とも云ふ可く、猶彼の電話機が同時に遠距離にて聞かるゝ長き口舌と云ひ得べきが如し、第一圖に其形を示せり、此機の發明者は、少壯より電氣交通上の事に意思を凝し、夙に舊法の缺點に着目し、如何にもして之れを改良せんと、多年の苦心の後終に此機を發明したるなり、發明者が此機の製作を創めたるは、實に今より六年以前にして、老練なる助手を傭ひ、適當なる工作場を構へ、爾後改良に改良を加へ工夫に工夫を凝し、始めて今日の完成を致したるものにて、其間の苦心實に想像すべく、彼の一朝一夕の考案に成る淺薄なる機械と、同一視すべきものにあらざるなり、

機械全軀の構造を精細に説明せんは、素より容易の事にあらず、茲には唯其使用法に就きて一寸一言すべし、此機の發信器と受信器とは別に備はり居れり、發信には普通の鉛筆を用ゐる仕懸けにて、此鉛筆の尖頭に近く、相互に直角を爲す様に、一條の絹絲にて括り、此絹絲の端は機關と結合し居りて、其作用に因り、發信鉛筆の運動に隨ひ、電線の他端なる受信の筆を動かす仕懸けなり、紙は普通のものを用ゐ、幅五インチ位にて、機械に結合せる軸に巻き付け、發信者が紙を動かさんと欲する場合に、左側の槓杆を押す時は、電氣の作用にて、同時に受信者の方の紙をも動かし得るなり、受信の方にては、微細なる硝子管が備へあり、此管は不斷墨汁を供給せられて、發信者の鉛筆と同時に同方向に動くを以て、發信者の描くと同様の書又は畫を紙上に描くなり、第二圖に示すものゝ中、左方なるは發信者の描きたる者にして、右方なるは受信の紙上に現はれたる者なり、前者は鉛筆にして後者は墨汁なるが、何人も容易に其差違を見別る能はざるべし、此機の電信電話等に勝れる要點は、單に言詞のみならず、圖畫其他如何やうなる符號にても、隨意に通達し得べきことなり、此機の特有する效用を概説すれば左の如し、

此機は各自其自筆を以て通達し得らるゝが故に、多人數が相關係して一事務を取扱かふ場合にも、互ひに懸隔し乍ら恰も一同が一室内に在るが如くに用を辨じ得べく、從來書狀にて交通し來りたる事は、一切此電線にて辨じ得らるゝ故、今日の電話の如く、一般に此機を使用するに到らば、都府の商人等、復書狀を發するの必要無きに到らん、數多の市府の交換局より、悉く本線に結合することを得るを以て、商人などが遠隔の地に在り乍ら、自筆にて即時に我家に向ふて命を下すを得、又證書を認め爲替を組み、或は株券の賣買其他金錢上の約定取引等を爲すに最確實なり、又新聞社などが、之に依りて通信を受取る時は、電信等と違ひて通信者の自筆を得るを以て、其條款を確め得べく、又人の肖像などを、即時に遠隔の地に通じ得らるゝを以て、探偵上に非常の便利あり、而して秘密通信を爲す場合には、實に之に勝る者なし、電書機は電信電話と異なりて、發信者と受信者の間に在りて働くの人を要せざれば、決して秘密の漏洩する患あらざるなり、發明後日尚淺きを以て未だ偏ねく用ゐられざれども、遠からず一般に設置せられて、電信電話等を壓倒するに到るべし、

最後に、飯田旗軒の「日本と欧米」について触れておく。

### 三 日本と欧米

飯田旗郎

雪月花一度にみする卯月かな、とは貞徳と呼べる風雅人の詠みたる句、今日此頃の花日和、花ならで雪、雪ならで月、四邊満目、花も雪も月も一度に見る此卯月ぞ、誠に嬉しかりける  
中にも櫻花、朝日に匂ふ山櫻こそ、花の王とこそ申すべけれ、之れも千代ます大君の恵にこそ朝日に匂ふ日本帝國は今や實に此卯月に際會せり、花は満ち雪に景色を添へ月も稍景色をととのへて一時に國民を喚起せしめたり

弱きを救ひ邪を挫く、正々堂々仁義の師を起して惡逆無道の豚尾人種を膺懲したる其結果は、日本帝國の眞髓を萬國に發揚し、大和撫子の名譽と優秀とを宇内に照遍せしめたり、花に嵐の小山ありしは寧ろ世の中の常情なりけれども、之を償ふに無條件休戦てふ大度大仁の待遇をなしたるは萬人が萬人思ひ設けざるところ、宜なり平常吾國に敵意を表する海外人も流石に口を閉じて黙退するより外はなく、萬國の新聞紙上下人士、高義博愛寛仁に感動して日本國民の度量識神、其眞髓を度り兼ねるに至りたるは甚だ以て愉快の至りなるなり

米穀、被服、軍器彈藥、金銀財寶、此の如き分捕物は其數を知らず、黄金の山を積み重ねて築きたる大軍艦や砲臺、白銀の函を巻き散して設計したる港灣や田地、悉く皆な吾が手に占領せられて自由自在、而して今や幾億萬の償金は這入りて帝國に充實せられ、肥沃なる土地は改めて帝國の版圖に加はりて其富を殖さんとす、

試みに償金を取りて考究せよ、假りに五億兩と定めて之を計算すれば、其總重量五百四萬貫目となり、噸數に換算して一萬八千六百有餘噸となる、之を一千噸積の船舶にて清國より我國に運搬せんには汽船大凡十九艘を要すべし、今又之を日本貨幣に換算せば七億五千六百萬圓となり、之を一圓銀貨を以て一ツツに列べて延長すれば七萬三千三百有餘里となる、即ち全地球の中心を五六回廻はすに足るべし、豈大なる富には非ずや

之に加ふるに無形の大利益、金力もて得られざる富、帝國民の仁義博愛の大性質は光輝を以て萬國に發露し、宇内最も完全なる社會は吾が日本帝國にのみ之を見ることを得べきに至らんとす  
景色の麗はしき、氣候の温なる故を以てのみ知られたる帝國は今日以後は總ての點を以て世界に顯はれんとす、世人巴里を稱し極樂淨土と言ふと雖も、之れは寧ろ外觀人工的の極樂淨土のみ、眞の人間の極樂淨土は實に吾が帝國に於てのみ見出すを得べけん

朝日に匂ふ山櫻、今日此頃の帝國は抑も如何なる有様に在る乎、春光陽氣に浮かされて夢か現の時候に心思蕩然たらんとするが如く、雪も月も花も一度に眼前に現はれ來りて國民は殆んど己れを忘れたるが如きなり、極樂は天にのみ在りと聞く、果して然らば此榮華の花は一ト時の夢か、榮華の餘り一時に、餘りに大なるは吾人をして夢心地あらしむるなり、『邯鄲』は夢物語なりと聞く、其夢物語は實に帝國民の今日及今日以後の有様を言顯はせるなり、呂生の夢に云はく

有難の景色やな、もとより高き雲の上、月も光は明らけき、雲龍閣や阿房殿、光もみちみちて實にも妙なる有様の、庭には金銀の砂を敷き、四方のかごめの玉の戸を、出入る人までも、光を飾る粧は、誠や名に聞し、寂光の都喜見城のたのしみも斯くやと思ふばかりの景色かな。千顆萬顆の御寶の數をすらねてさゝげもの、千戸萬戸の旗のあし、天に色めき地にひびく籟の聲も夥し、籟の聲もおびたゞし。東に三十餘丈に、銀の山をつかせては、金の日輪を出されたり、西に三十餘丈に、金の山をつかせては、銀の月光を出されたり、譬へば是は、長生殿の内には、春秋をとめり、不老門の前には、日

月遅しといふ心を學ばれたり（中略）悦びの歌を謠ふ夜もすがら、日は又出で、明らけく成つて、夜かと思へば晝になり、晝かと思へば月またさやけし、春の花さけば、紅葉も色濃く、夏かと思へば、雪も降りつゝ、四季折節は目の前にて、春夏秋冬萬木千草も一時に花さけり、面白や、不思議やな……

愉快、愉快、生きて此世に會ふ亦人類の至幸と言はずして何ぞや、然しながら此至幸を受くると同時に、此大名譽大幸福を國家が永く保持して此世に立たん事、吾人の希ひ且務めざるべからざるものなり、歴史は埃及や羅馬や希臘やネーブルが邯鄲的の極樂社會を作りたることを示したれども、今日我等の邦土が如何の現況に在るか言はずとも讀者は知らん、今日は殆んど野蠻人種の實相を呈する支那人も孔夫子の如き大人傑を太古に於て出し、儒教禮樂哲學倫理の如き殆んど天力に非ざれば案じ得ざる至理を言明せしなり、日本今日世界の完全なる美強なる社會を組織し得ても、永く之を保維するの精神を國民に固着せざるべからず、仙家の酒かうがいの盞、壽命は千代ぞと菊の酒、榮花の春も萬づ歳、君も豊に民さかへ、國土安全長久の、榮花も彌増に猶悦びは増り草の、菊の盞とり、に飲み傳ふこそ、名におふ神州國民の心懸なるべけれ

有識なる國民は既に膨脹後の帝國に關して經綸を説けり、戦後必然に起るべき商戦に就て、國民教育に就て、戦後の財政經濟に就て、新版圖の拓植に就て、海陸の軍政整頓に就て、種々の問題を提起し、之を講究し、之を説明せり、余も亦商戦方略に就きて卑見を述べ、又卑見を述べんと欲するものなれども、今本篇に於ては暫らく茲に論及せず、余は本編に於ては日本人種なるものは如何なる實躰を備ふるものなる乎を講究し彼の歐米人種、夫の英獨米露西那佛等人種は如何なる實想に在り、如何に成り行く可き乎を講究して、少しく日本國民の將來に論及せんとす

四邊満目、萬木千草、皆花ならざるはなく、單重櫻、八重櫻、桃李、梨花、山吹山茶、櫻草蓮蕁、所謂百花爛漫各々其躰を保ちて彼處此處に立てるは今日此頃の世界なり、十人十種、百草百色の趣を有して生えたる此草花、何れ優り劣りの有るべき筈なく、紅は紅、白は白、黄は黄、桃は桃、其特色は各之れを有す

世界の人種、白きあり黒きあり、赤きあり黄なるあり、恰かも今日花の種々なる色を保ちて彼處此處に生えたるが如く、國民を形造くりて存在す、白なるもの最も善き乎、黒なるもの最も好き乎、將た赤か黄乎

花の色の如く、白き人種善しとのみ限らず、黒きもの悪しとのみ限らず、赤き人種に勝れるものあるべく、黄色人種に優れたる性質もあるべし、唯人類は萬物の靈とありて頭腦精神を有するを以て、頭腦骨格に由りて其性質智識に相違を來すことあるべきも、單に色のみを以て智力精神を判断すべけんや、況んや、西洋が未だ蒙昧なる間に、東洋は一ト度隆盛なる文明開化の花を有したることあるに於てをや

然るを、彼れ西洋人は殆んど學理より割出したるが如くに、世界の最優等人種は白色人種にのみ限るものとし、東洋黄色人種其他は未來永劫白色人種を凌駕する能はざるものと断定せり、吾人は一度は西洋の開化に眩惑して或は然らんとも考へたりけれども、西洋其物を實視するに及んで其の大に誤まれるを自覺し、今回の戦争に由りて、吾人眞の開化は或は反つて西洋人に優るところあるべしと考へしむるに至れり

世界に白色人種に優る人種なく黄色人種は到底劣等人種と西洋人が判断したるは彼等自稱開進光明國民の無學粗漏を自證するものなれども、余輩は少しく彼れの此妄斷に斟酌を加へざるべからざるものあるなり、彼等は東洋に支那の覇たるを思へり、支那人民は東洋に於て大數にして實際最も開けたる民なることを思へり、支那人が大數なる故に其内より見本を取り、其人種を標準として日本帝國國民

を付度したり、彼等は支那人同様の人種が少しばかり日本と云ふ島に殖民して國を作したりと考へつゝありしなり、支那を除けば日本は無きも同然と考へたりしなり、其支那國支那人が今日の如き支那國支那人、西洋人が之に由りて日本を付度したる又大に恕すべきものあるに非ずや、則ち之を反言すれば日本人は支那人の爲めに其眞髓を誤まれて非常に世界人民より冤罪を祈りたりしなり、此點よりしても充分日本は支那を膺懲し、之を開發し嚮導して以て進むの權利義務あるものとす  
今回征清の擧、弱韓を助けて其獨立を鞏固にし、盲清を膺懲開發して幸福の民とし、以て東洋の太平を謳歌せんとするの目的にして、戰爭の仕方敵國に對する方法、完全無缺文明大國の所爲として一も嘴を入れるゝ能はざる程なれども、歐洲人の或るものは尚日本の眞髓を看破せざるぞ愚なる、余が友の一人去歲々末に歐洲某國に渡航したるものゝ通信は其國民が日本に對して抱くところの思想を書き出して面白きものあり、彼れの通信中に曰く

昨今こそは如何な頑固な○國民でも稍吾帝國の眞價を認め來り候へども、未だに支那を開化がりて眞底より日本を知り候ものは少なく、情なき否○人に取りては其無學なるを憫と思ふ程に御座候、今此度の戰爭の始より今日（威海衛陥落に至る迄）に至るまで一般○國人が如何に考へ又如何に其考へを變化し來りたる乎を左に描出仕り貴覽に供し候

#### 第一戰爭の將に始まらんとする時

『日本が清と戦ふ？聞いて諦めたものだ、止せば善いのに、蟻螂が斧だ、兎角ジャツプは生意氣で困る、西洋風を真似るのは善いが、上面ばかり真似て無茶苦茶で只やつて居るばかりだ、何と言つたつても國は三十倍も小さく、人口は十倍も少ない、夫れに手向ふなんぞつて、身の程知らぬも随分酷い

#### 第二牙山及び黄海戰爭の後

『オヤ々々？……然し一躰日本人は容躰は小さいが氣が勝つてる人民だから、始めの一度や二度は

勝つかも知れない、寧ろ支那人は安心してかゝつたらう、マア見ておいでなさい、逆も駄目だから

#### 第三平壤の陥落した時

『勝に乗じてと云ふのだらう、マア夫れにしても見掛けに寄らない感心な奴だ、然し支那人は少しジヤツプを見下げて係つたのだらう、李鴻章がホンの手下のものをやつて平げ様としたのでまだ支那國政府が兵を派遣したといふのでは無からう、何を言つても支那には多年仕込んだ潜勢力が堅く強いから幕の内が二段目か三段目の相撲をあしらふ様なものだ、本式に立上られては日本は溜るまい

#### 第四旅順口陥落の前

『平壤義州までは漕付けたが滿州の寒さにやア到底かなふまい、それに今日の電報に由つて見ると花園口へ上陸した様だが、何億と金を費ひ、有りと有らゆる新式武器を備へ付た旅順口は一十月や二月で落ちるものではない

#### 第五旅順口陥落の後

『案外に脆く落ちて仕舞つたのはどうも不思議だ、支那人も商賣は上手だが戦は餘り上手でないに見えるな、日本は學生を海外へ派遣したりなぞして、おれの國へも士官を見習に寄越したり、又軍艦を逃へたりなどしたから、ツマリ夫等の爲だらう、夫れにしても餘まり馬鹿にもならぬぞ

#### 第六威海衛陥落（丁汝昌の降参前）の時

『實際力量はあるのかも知れぬが、日本は疾から清國と戦ふ積りで盛んに用意して居たに違ひない、斯う善く往くと云ふのは案外だ、然し兎に角東洋では最強國と稱して可からう

斯う勢に乗さられては何んな事を清に要求するかも知れない、少しおれの國の東洋艦隊の軍艦を殖して厭力を加へて置かないといけない

彼等の考想の如何に變化せしやは瞭として明なり

「タイムス」は英國一の新聞なり、否世界第一の新聞なり、其タイムスは今回の戦争の始に於て如何なる説を立てしか、試に去歲十月下旬の社説に就て一閱せよ、彼れは實に左の如く云へり

北京攻撃は一時實事らしく傳播されたれども、此事の如きはホンの一時の痴人の夢想 (a beautiful dream) に過ぎざるのみ……臺灣島への征進は今日位の海軍では到底實行を得べからず、譬へ日本は鴨緑江にて捷利を得て自慢心は有しては居ても駄目なり……旅順口攻撃の如きは唯口に稱へらるゝのみに止まりて實地着手は中々に仕能ふまじ、マカリやり損くなつたら一大事、日本人に大不得策、殊に冬期に向はんとする今日に在つては尚更なり

右に掲げたる目論見は列べたばかりで到底實に駄目なるべし、タトへ一ト月を與へ、又は日本人の望通りに六周日を與へても成功は萬覺束なかるべし、總て日本人が始め出したる此度の戦争は實に雲を攫む様な戦争にして、日本が稱ふる「支那の野蠻を膺懲し開明の光輝を注入して共に幸福生存を圖る」など云ふ事は此上もなき六ヶ敷き事覺悟せざるべからず、夫れよりも日本は早く戦争を止めて其非望を斷念することを要す……

此社説がタイムスに載せられて、而して未だ旬日ならずして旅順口は美事吾軍の手に入れり、而して遼東半島連戦連捷北京にも將に進撃するの機會を顯はしたりき、余は實に此報の達したる時のタイムス記者の顔が見たかりしなり

大英國に於て學者の中に其人ありと知られたる、サー、トーマス、ウエード氏 (カムブリッジ大學清語教授)、英國人民は大なる信用を以て其説を聞くところのウエード先生の説に云はく、日本は多年總ての用意を整へて従事したる事ゆゑ、戦争には或は勝つべし、倭清國全敗して或は其首都を北京より他に移す等の事あらば、國內は今の皇室に不人望をなし、叛逆を企て、國內擾亂すべし、茲に至つて歐米各強國の沈黙せんとするも得べからず、武力を以て干渉し、各其地を分割して占領すべきなり、

倭日本は如何に成行くかと云へば、折角に清國に打勝ちても數年を経ずして今度は自ら犠牲となり、恰かも自己が清國を討撃し蹂躪したるが如くに、歐米國民の爲めに干渉せられ、奪略せられて止む可し、云々

余輩は固より此の如きウエード氏の迷論に感服するものなり、ウエード氏がウイスキーを飲んで吐きたる論として、其面白きに一笑を催すところなれども、彼の英國の人士は多く眞面目に此論を (少なくとも戦争の始めに於て) 信用するぞ憫なれ、而して彼の心中は果して如何

彼等は兇漢小山の所行を聞いて何と日本を評したりしや。「矢張東洋野蠻的の性行 (Eastern barbarous style) を免かれざりし」と速断したるに非ずや、彼等は無條件休戦許可を聞いて何と評したりしや、之を稱揚せざりしには非ざるも「日本皇帝陛下が休戦を許し給へるは李鴻章の兇變を悲ませらるゝに出でたりといふは、未だ遽かに信ずべからず、日本は元來斯かる人情の爲に國是の方針を動かさざるを常とすればなり、然れども若し日本にして果して公然兇變に免じて此舉を爲したりとせば、日本は優くも宇内の輿論に順行するに至りたるを證すべし、云々」此批評振りを熟味せよ、休戦は兇變の爲なりと云ふを疑ひ、日本は元來斯の如き義侠高義を知らざるの國となせるなり、果して公然、堂々たる無條件休戦條約の冒頭第一を讀まば彼れは如何するや、彼れは常に反對に惡の推測を下す、而して我は常に其反對の善に行へり、彼れは其見込違ひの何時も甚だしきより彼れ自身に不愉快を買ひ、公明正大の評を下さずして嫉羨の心を以て知らずゝに我れに對するが如し、彼れ今日も尚吾が眞價を認めざる乎、日本人は彼れに劣るとする乎、黄色人種は白色に及ばずとする乎、尚白色人種を以て最優等の人と族認むる乎

歐洲に於ける人種は總て之れ白哲人種に非ずや、然かも其或者は日本人よりも遙かに蒙昧なるものに非ずや、其社會は不完全なるものあるに非ずや、其財政は亂れたるものあるに非ずや、就中公徳の

亡退し倫理の亂れたるは歐洲何れの邦國に於ても然らざるなきなり、獨り第二等國と云はるゝものに止まらず

試に視よ、歐洲に於て米國に於て、其中心に於て尚今日も恐る可き野蠻的の非行社會に多きは何ぞや、余は他國民の非行欠典を擧げて茲に列擧するは敢て好んでするには非ざれども、歐米國民も未だ決して光輝ある開明國に非ず、日本國民は決して彼れに劣りたる人種に非ず、人間に難しとする無形道德の開化に至つては反つて西洋人に卓越し、今日以後は有形無形共に早く彼等よりも文明開化を作り、世界に於て劈頭第一に完全なる眞の文明國となるべしと云ふ事を證據立てんが爲めに、歐米國民の間に於ける非行事件を一二茲に曝露せんとす、

余は第一に英國に就て見ん、讀者は龍動ホワイトシヤペルに於ける虐殺事件を知れりや、一ト月餘りの短かき時間に十數人の女が交る々に酷殺せられ、肢躰を屠られ陰部を〇り去られ、而して警察は血眼になりて探偵を盡して其目的を果すこと能はざりしに非ずや、自治黨の綜理有名なるパーネル氏はオシア陸軍大佐の夫人と姦通して遂に夫婦の如くなりたるに非ずや、白鬼は白晝に横行し錢を巡查に與へて淫行を擅にするに非ずや、人は同じく巡查に錢を拂ひて公道に垂れ流しをするに非ずや佛國は如何、吾國民に類似せる性質を保有し、而して常に何事にも同情を表し呉るゝ佛國民の社會は道德倫理の道に於ては著しく衰退せり、而して此事は彼の社會に於ても識者は大に憂ひて矯正改良の策を廻らしつゝあるものなり、佛國民に於て著しき欠典は道德とす、蓋し世界人士が巴里等を以て極樂に等しき娛樂の場所とするは、己れが内心に思ふ私慾を意の如くに施し能ふ故なり、試に看よ、巴里に於ける賣淫婦の數三萬を越ゆと云ふに非ずや、市中は云に及ばず、芝居寄席鐵道列車の中、鐵道馬車の内、隅々隈々二六時中、白鬼を見ざるなきは其實景なり、賣淫婦は此の如しとして中等上等の婦女子の或者は如何、余はジルブラと稱する大新聞の廣告に左の如き廣告を見たることを記憶せり

J.F.jol.dist.des.anni riche,hon.age.A.I.D bur.68.

〔譯文〕若き美しき秀でたる一婦人、富貴なる年頃の友達を求む、符號當新聞社六十八號エー、アイ、デー宛にて返事を寄越さるべし

Jne.h.seul,fort.des.passer.belle saison av.J.pers.jolie,station エーエー choix.Ecr.av.phot.E.V.poste restant Marseille.

〔譯文〕獨身の若き健全なる男子若き美しき女子と此夏季を何れかの遊び場に過さんとす、御望の御婦人は寫眞を添へて馬耳塞郵便局留置郵便を以て御申越あれ

J.F.du monde des.anni meme age q.aid p.toil.A.L.124post.rest.PlaceClichy.

〔譯文〕去る身柄の若き一婦人同年の男子にして化粧の世話など出来るものあらば友達に持ちたし、御望の仁はクリツシエー町郵便局留置郵便符號エーエル宛申込まるべし  
佛國の社會には斯の如くに淫事公行せられて而して人は左程に不都合とも思惟せざるなり、豈驚ろくべきに非ずや

開化が進めば進む程、殺伐的の出來事は減ずる道理なるに、佛國にては今日も尚決闘を行へり、中流以下の社會のみに非ずして、國務大臣の如き上流の人士が屢々決闘を行へり、夫れ決闘は一面より考ふれば勇武の魂を養ひて良好なる結果を一國民に與ふるが如しと雖も、野蠻の遺習方法たることは到底免かれず、干戈に訴へずして事理曲直を明かにし得ざるの理屈はなし、道理を以て爭論を完済し得ざるは之れ野蠻世界に非ず乎

此他、六十歳の男子が十歳の少女を強姦したる事あり、グレヴィー大統領の婿ウイルソンが賣爵をなしたることあり、近くは又、一人の敵なく人望類なかりしカルノーを刺殺したる兇漢の如きものあり、何れも文明を疵けたる六汚行たるを免かれず

獨塊に於ては如何、某貴顯は常に一女優に狃れ給ひて梅毒を受けさせ給ひたる話しもあり、某皇太子は妻子を持ちながら某伯爵夫人と私通して其極情死を遂げられたる例もあり、平民男女間の私通は殆んど公然、蓋し今日より甚だしきものあらざるべし

白耳義に於ては如何、去年アントウアープ府の上流社會に人も知りたる某夫人は只々暴富を得んが爲に二ヶ年の内に其實の妹や叔父や夫れのみならず最愛の夫をも毒殺して保険金を詐取したるが如き恐ろしき事あり

又議員選舉の際の如き、黨争の極腕力武器に訴へ、國中暗澹たる景況を呈せるが如き、余が屢々實視したる所なり

又社會黨の如き、國中に蔓延して殘毒を逞くし爆裂薬を利用して公安を害するなどの例少なからざるなり

露國に於ては如何、虚無黨なるもの屢々殘虐手段を行ふて王族を害し、恐るべき手段を以て社會を横行せり

偕又北米合衆國に於ては如何、大山賊大強盜、鐵道列車を山中に劫かして殺伐奪略を擅にすることは珍らしからず、尚之よりも見苦しきは、勞働者と資本主との調和一致せずして、單に同盟罷工をなすに止まらずして、武器を以て資本家を却かし、堂々たる都府の中心に腕力を用ゐて目的を達せんとするが如き、亞弗利加に於てのみ見るべき所行は社會に絶えざるなり

總じて歐米國は耶蘇教國にて有りながら實際には自由思想家多くして耶蘇教は措て問はれざるに非ずや

以上掲げたところの邦國は歐洲の大國則ち世界の大陸、最も光輝ある文明國 (Most enlightend people) と稱するものなり、而して以上列擧する例題の如きこと社會に其跡を絶たざるは何ぞや、第

二等國以下の歐洲諸國の如き喋々を要せずして推知するに難からざるべし

彼等は一概に白色人種を以て最優等最完全人種となし、黄色其他の人種を以て劣等人種となせり、彼等は餘りに自信深し、彼等は餘りに自傲大なり、英國新聞は頃日頻りに其紙上に支那の執念くも和を口にせざるを云ひ、其自信自傲を折りて日本と媾和すべきことを勸告し、余輩も亦之れに同感を表するものなれども、先づ第一に英國人自身も其自信自傲を止めて可なり、明かに眞實に日本の彼等に寸毫も劣らざる優等人民なることを承認して可なり、黄色人種の中にも日本人といふものあることを認めて可なり、色の相違を以て一途に人種の優劣を判断し能はずと肯諾するを要す

西洋人は文明開化は西洋にのみ有りと固信するが故に西洋より外は深く研究せず、西洋より外には眼界淺薄なり、彼等は己れのみを知りて他を知らず、吾國は元來世界の歴史の潮流に出でず沈黙してありしの故を以て彼は和を知らず、只彼等に始めての一新國民なるが故に直ちに未開と斷定し、劣等人種と誤解せるなり、而して吾れは東洋に多數の、然かも今日の如くに野蠻的の形質ある支那人の爲めに其評判を被ぶりたるなり

吾れは永く眠りつゝありたれども、國內に秩序ある美しき社會をなして一天下として生活しつゝありしなり、立派なる一の開化を有して生活しつゝありしなり、吾れは自然の勢道に従ひて國を開き、而して世界を見たり、世界の他の文明を見たり、他の文明を見て其珍らしく重寶なる又外觀の美なるに眼くらみて一途に之を此上なきものと思へり、然しながら、途中に於て熟考せり、自己固有の文明より思ひ返へせり、則ち自己も亦一の文明西洋人の知らざる一の文明を有せることを發見し、之を保持することを務めたり、即ち日本は西洋の開化を講究し盡し、而して之に自己固有の開化を加へて一の大開化を作せるものなり

世界人士若し此儘にして進まんか、吾が日本帝國は有形無形東西洋の開化を蒐めて世界に雄飛せん、

精を抜き華を取りたる眞文明を形造くりて、世界の歴史に一ト花咲かすべし、” Fin desiecle, (十九世紀の末路) に在る歐洲世界は無形道德精神的の文明に於ては同じく末路に在る乎、日本帝國の戦捷新文明の曙光は社會人士の内心を刺撃せざる乎、朝日に匂ふ山櫻は此卯月に會へり、花は満ち、雪と景色を添へ、月も稍景色をととのへたる此卯月は、斯國民をして心腕を擅にせしむる也

おわりに

明治時代の本邦における欧米諸国との関わりについて、右の三資料を読み解くことでもってその実態について確かめてきた。このことが、現代の日本文化と欧米文化にあつて、どのように変容してきているのかをここで考えて欲しい。最後に、日本の自然風土に勝るものは無しという話ししておく。その一つに豊かな水の恵みを忘れては成るまい。